

## 「風の向こう側に(仮)」映画プロット

### ■ログライン

りんご並木に置かれた「焼けたランドセル」の謎。教師と不登校の少年はそこに残された戦争の記憶と大火の後に築かれた絆を知り、それぞれの「未来への希望」を見つけていく物語。

### ■主な登場人物

原田 久光 (33): 東中学校の教師。不登校の智則や妻との問題を抱え悩んでいる。

斉藤 智則 (14): 不登校の2年生。孤独を抱えるが、並木の剪定活動には参加し続けている。

原田 かえ (32): 久光の妻。不妊治療の結果が出ないことに心身ともに疲弊している。

古池 宏 (88): 並木のOB ボランティア。日本で唯一相撲の元結を編む水引職人。

### 【あらすじ】

長野県飯田市。戦後の大火から復興した町の象徴として植えられた「りんご並木」は、今も中学生や地域の人々の手によって守られている。

東中学校の教師・原田久光は、教室で出席を取るたびに、ひとつ空いたままの席を見つめている。その席の主である智則は、不登校の生徒だった。

放課後、久光がりんご並木を訪れると、そこにはボランティアの古池宏と、黙々と剪定作業を続ける智則の姿がある。久光が声をかけても、智則は目を合わせようとしない。

一方、久光の家庭では、妻のかえが不妊治療の結果に心をすり減らしていた。何も言葉をかけられないまま、久光はただその場に立ち尽くしている。

そんなある朝、りんご並木に「焼けたランドセル」が置かれているのが見つかる。中には古いノートが入っており、そこには「ぼくは戦争でお父さんを亡くしました」と書かれていた。名前は渡辺聡。約70年前、この町に住んでいた少年だった。

この出来事はニュースとして広まり、りんご並木には多くの人々が訪れるようになる。人々は写真を撮り、語り、やがてその場所は「出来事」として消費されていく。

智則は、その光景に苛立ちを隠さない。一方、宏は何も言わず、ただ並木を見つめ続けている。

やがて智則は、宏の仕事場を訪れる。宏は、相撲の元結を編む水引職人でもあった。細い紙をより、結び、形を整えていくその手仕事に、智則は静かに見入る。

「結びってのはな、一度ほどいて、もう一度結び直すこともできる」

宏の言葉の意味を、智則はまだ理解できない。

宏は、ひとつの古い手紙を取り出す。それは、かつて広島に移り住んだ少年・渡辺聡から送られてきたものだった。

「りんご、ありがとう。とても美味しかったよ。こっちでもりんごの木を植えてみました」

しかし、その後、手紙は途絶えたという。

数日後、智則は姿を消す。彼はひとりで広島を訪れていた。

平和記念公園や資料館を巡り、戦争の中で生きた子どもたちの記録に触れる。  
そして、手紙に記された住所を頼りに辿り着いた場所には、一本のりんごの木が立っていた。  
その木は、今も誰かによって手入れされていた。過去は、完全に途切れてはいなかった。

やがて智則は、飯田へ戻る。

駅で待っていたのは、母の あかり と 久光、そして 宏 だった。  
宏は自分の過去に責任を感じ、静かに謝罪する。 智則は何も言わず、一通の手紙を差し出す。  
そこには、長い年月の中で途絶えていた理由と、遅すぎた言葉が綴られていた。

その夜、大きな台風が町に接近する。  
久光は、これまで何も選ばず、誰とも向き合わずにいた自分に気づく。そして、嵐の中へ飛び出す。

りんご並木に辿り着くと、そこにはひとり、初代の木を必死に支えている智則の姿があった。

「帰ろう」と声をかける久光に、智則は初めて強く言葉を返す。

「帰らない」「ここ、なくなったら、もう何も残らないだろ」  
その言葉に、久光は何も言えなくなる。

守るべきものは何なのか。結び直すことはできるのか。二人は並んで、激しい風の中で木を支え続ける。

やがて台風は過ぎ去り、町には静かな朝が訪れる。

——久光が教室で再び出席を取っている。 智則の席は、まだ空いたまま。

しかし放課後、りんご並木へ向かうと、そこには剪定ばさみを手にした智則の姿がある。  
久光に気づいた智則は、ほんのわずかに笑う。

季節は巡り、秋にはりんごが実り、冬を越え、春には花が咲く。

並木の下では、久光とかえが並んで座っている。  
かえのお腹は大きくなっている。

少し離れた場所で、智則は静かに木の手入れをしている。その手元には、不器用に結ばれた水引がある。

風が吹き、花びらが舞う。

りんご並木は、変わらずそこにあり、  
人の想いは、形を変えながら、静かに次の世代へと受け継がれていく。（終）